

口康彦

薩摩軍法

新人物往来社

滝口康彦（たきぐち・やすひと）

本名 原口康彦

大正13年佐世保に生まれる。佐賀県北多久尋常高等小卒。運送会社事務員，炭鉱員を経て昭和32年頃から文筆生活に入る。

著書 「異聞浪人記」（光風社書店）「拝領妻始末」（光風社書店）「仲秋十五日」（光風社書店）「落日の鷹」（講談社）「佐賀歴史散歩」（創元社）「鍋島藩聞き書き」（新人物往来社）

現住所 佐賀県多久市北多久町多久原

薩摩軍法

昭和四十九年二月二十日 第一刷発行

著 者 滝口康彦

発行者 菅 貞人

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三の三の一（新東京ビルディング）〒一〇〇
電話東京（二二二）三九三一（代表）振替東京一五一六四三

印刷所 文昇堂

製本所 小泉製本

定 価 九八〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。



目次

薩摩軍法 五

鶴姫 四

白梅月夜 九

かげろう記 一九

奸臣と人のいう 二五

仲秋十五日 二〇

あとがき 二三

葵・倉橋三郎

薩摩軍法

薩摩軍法

一、一人の敵をも殺したる証拠なきものは死罪、その父子親族は重科に処せらるることあるべし。

一、わが隊将の首級を敵に委すべからず、この仇を報ずるあたわざる時は一隊ごとく討死せよ。

島津家軍法

一

鹿兒島の西北三里ともいい、あるいは五里ともいう。むかし姫野と呼ばれる小さな村があった。いや、村というより、おそらくは薩摩領独自の門割制度による、いわゆる方限であつたろうか。薩摩では門割の単位となる一戸の農家を家部と称した。その戸主は名子である。いくつかの家部の集つたものが門で、門の長は名頭もしくは乙名といった。方限は門の集つたもので長は名主と呼ばれた。

姫野が今のどのあたりにあるかは明らかでない。ただわかっているのは、ほど遠からぬところに重平山が望まれたことだけである。その姫野に一つの墓があつた。墓地にあるのではなかつた。姫野の北のはずれ、隣り合つた二つの村への岐れ道近くに一もとの松が枝をひろげていて、墓は

その松のかたわらにあった。墓とはいっても、雑草の中にさほど大きくもないありふれた自然石がやや傾きかげんに立っているのみで、石にはなにも刻んでなく、竹の花筒が目に入らなければ、だれ一人墓だとは気づきそうもない。まことに石はひっそりと立っていた。

墓の主がだれなのか村人はまったく知らなかった。古老たちでさえ例外ではなく、知ろうとつとめることも今はないようである。強いていえば、古老たちのうち何人かは、その石がいつごろそして、だれの手で立てられたということだけは、おぼろげな記憶の底にとどめていた。もうかれこれ七十に近い、与茂作よもさくという老人がいる。墓は与茂作が、まだ若かったころ立てたものであった。

二十三、四のころ、与茂作は、一度村を飛び出している。いや飛び出したといつては嘘になる。どこかの合戦の折、兵糧運びとしてかり出されたのがきっかけで、そのまま何年も家にはもどらず親もあきらめていた。くわしくはわからぬが、鹿兒島衆中しゅうじゅう（鹿兒島城下の武士）に奉公していたらしい。それがあつた年ふらつと姫野にもどつてくると、間もなく女房をもらい、まっくらになつて野良仕事に精を出した。女房はおきよといった。

当の与茂作をのぞけば、石のことを、いつまでも忘れず覚えていたのはおきよであつたろう。なんでも、いっしょになつていくならぬ十一月の末だった。南国薩摩にはめずらしい寒いある日、与茂作は庄屋に頼まれた用事で鹿兒島まで出かけたが、日の暮れがた思ひつめたひどく青い顔をしてもどつてきた。心配した両親やおきよが、なにかあつたのかと問いただしても、いやと首をふるだけで一向にわけをいおうともしなかつた。その夜与茂作は、しきりに寝がえりば

かりうった。おきよは気がかりで仕方がなかったが、昼間の疲れで、いつの間にか眠ってしまった。それからどのくらいたっただろうか。おきよはふっと目をさました。あたりはまだ暗く、夜明けにはだいぶ間がありそうだった。

夢うつつの中で、おきよははねつるべのきしみと水の音を聞いたような気がする。が、今はしんとしていた。そら耳だったのか。またうとうとしかけて急にどきとした。手のとどくところにいる筈の与茂作のからだがなかった。与茂作は井戸ばたにいた。まっ白い下帯ととりかえ、洗いざらしながら、こざっぱりした着物をつけ終ったところだった。おきよは声をのみこんだ。

与茂作は家の中にもどると、ゆうべの残りめしを、水をぶっかけて流しこんだが、それがすむと、大黒を祀った棚の下にすすけた竹の筒がかけてあるのを手にとった。竹筒の口は嚴重にめばりがしてある。与茂作は目ごろからその竹筒を宝もののように大切にしていたが、なんでそんなに大切にするのか、おきよはもとより、両親も知らなかった。

「おやじやおふくろを大事にしろ」

ほつんと与茂作がいった。声がひどくかすれていた。おそるおそるおきよはきいた。

「どげんしたと、あんた」

「鹿児島へいく。死んでくるかもしれん。わけはきくな。そのうちにわかる」

のみこむのにいつときかかった。それほど信じられなかった。おそろしい意味がずしりと胸に落ちこんだ瞬間、おきよは声をあげようとしたが、

「騒ぐな。まだかならず死ぬとはかぎっとらん。ひょっとすれば助かるかもしれん。が、覚悟だ

けはきめちよけ。よかか、おやじや村人衆にはもらすでなかぞ。ただ鹿児島へまた行つたただけいうんじゃ」

いやといえは、首もしめかねない与茂作の気がまえた。おきよは仕方なくうなずいた。与茂作は血ばしった目をして、さらに念を押して外へ飛び出した。まるで礫柱を背負わせられたような思いだったが、それでもおきよはいわれた通りにした。口外しそうになると、すさまじい与茂作の顔を思い浮かべた。しかし、おきよは最後に負けてしまった。陽が傾きかけたころ、なにもかもしゅうとに告げたのである。

「ばかつ、なんではよいわんとじゃ」

仰天したしゅうとは、鋏もなにもほうり出して、大声をあげて村人衆を呼び集めた。しゅうとめは、しらがを振り乱して、おきよをこづきまわし、ののしり散らした。小娘のようにおきよは泣いた。

当の与茂作が、すごすごとどってきたのは村人衆が集って間もなくである。いったいどうしたのだと口々にたずねる村人衆へ、なんでもなかと与茂作は一言いい、あとはなんとときいても口をつぐんで押し通した。

「人さわがせにもほどがある」

村人衆は、ぶつぶついつて引きあげた。おきよは、ばったのように頭をさげねばならなかった。その日から与茂作は、人が変わったように無口になり、石みために黙りこんでいることが多かった。わけはいわない。しつこくたずねると、

「うぜらし」

とどなった。

村人衆をさがせてから、二月ばかりたったころ、与茂作は、村はずれの岐れ道近くにある松の木のかたわらに、どこからか石を運んできて立てた。花を供えた竹筒で、墓のつもりだとわかったが、だれの墓だとは一言もしゃべらなかつた。おきよにさえもいわなかつた。さまざまうわさが立つた。女の墓かもしれないとおきよは思った。

「ばか、そげんもんじゃありやあせん」

与茂作は頭ごなしにきめつけた。そのくせ、だれの墓だとは明かしてくれなかつた。そんなある日、村の腕白わんぱくがわるさをした。松の枝に立ちあはだかつて、たかだかと小便を飛ばせ、墓にひっかけたのである。そこへ与茂作が通り合わせたからたまらない。血相を変えて走り寄った与茂作はいきなり腕白の足をつかんで引きずり落とし、顔が倍になるほどなぐりつけたが、それだけではまだおさまらず、松の枝に逆かづりにした。泣きさけぶ声に耳もかさなかつた。激昂した村人衆が、こんどは与茂作をふくろだたきにした。

気がついたのは日が暮れてからである。そばに石があつた。空には、初夏の月が、あわい光をなげていた。石のうしろの方から声がした。おきよだつた。

「あんた……」

「すまん。心配かけた……」

そのとき、しばらく忘れていた嫉妬が、おきよの胸の中で急に青い火を吐きはじめた。この石

は、だれの墓なんだろう。にじり寄って与茂作を責めた。与茂作はやはり教えてはくれなかった。「死んだお人と約束した。だから、おまえにだっていえん」

ただ、墓の主は決して女ではない、色恋沙汰から出たことではない、それだけははっきり誓うと与茂作はつけ加えた。嘘ではないとおきよは思った。無理に自分を納得させたのではなかった。そのときから、おきよは二度と石のことを口に出さなかった。

長い歳月が流れた。

与茂作はそろそろ七十に手がとどきかけている。おきよは数年前に死んだ。死ぬときも石のことはなにもいわなかった。与茂作のいちばん上の孫は、もう野良仕事ができた。

石はむかしのままひっそりと立っている。その石をめぐって、むかしどんなことがあったか、たいていの村人衆は、ほとんど忘れかけていた。だれの墓かたずねる者など、今はもう一人もなかった。当の与茂作でさえ、思い出すこともないかに見えた。ところが、ある日、門の乙名が名主をつれて与茂作のもとへやってきたのである。

「与茂作、庄屋さまからお迎えじゃ」

庄屋といえば、方限の長である名主よりもえらい。方限が集ったものが村で、その村をとりしきっているのが庄屋なのである。しかも薩摩では、庄屋は百姓ではなく郷士であった。

「庄屋さまが、なんの用じやろう……」

与茂作は足がふるえた。元和四年春のはじめであった。

うす暗くなるころ、庄屋の屋敷からもどってきた与茂作は、うちに着くなり、へたへたと上りかまちに腰をおろした。

「お殿様がわしをお城にお召しになる……。あの石のことで……」

今日、庄屋のもとまで、鹿兒島のお城下から、樺山なにがしという武士がきて、太守島津家久の命を伝えたのである。与茂作は途方にくれた。家久が、なんであの石のことを知ったか、よくわからない。ずうっと以前、この地方の地頭をつとめたことのある、本郷次郎右衛門が話をしたのかもしれない。しきりにため息ばかり出た。せがれや孫たちも不安そうであった。

数日後与茂作は、鶴丸城に召された。鶴丸城は、上之山にあるところから上之山城とも称され、慶長六年に当代の島津家久が築いたものだが、天守閣もない屋形づくりの質素な居館である。しかし与茂作にとっては、胆のつぶれるような存在に違いなかった。

その日与茂作は、本丸のお庭先で家久に謁した。家久は、広縁にすえさせた床几にゆったりとかけ、かたわらには、伊勢兵部をはじめおもだった老職、近習の面々、太刀を捧げた小姓などがひかえていたが、与茂作はただかすみがちこめているように感じた。

「だれぞの墓じゃとかきいた。何人の墓であるか、またいかなるいわれのあるものか、じきじきにききたい」

家久のことばに添えて、即答を許すとの仰せであるぞと、伊勢兵部がいった。ありうべきこと

ではない。薩摩、大隅、七十二万八千石の太守が、一介の老爺に即答を許す、それだけでも、家久がどれほどの興をそられているかがうかがわれた。氣も遠くなる思いで与茂作は額を地にすりつけていた。伊勢兵部に答えをうながされたが、しばらくは口もきけない。ふたたびうながされ、与茂作は、顔をあげずほそそとなにやらいった。家久も兵部も聞きとることができないでいると、

「せつかくの思召ながら、死んだ者との約束があつて、申しあげるわけには参らぬ。かように申しております」

近習の一人がかわつていった。

「なに、申されぬ。殿のおたずねに對して、お答えができぬとはなにごとじゃ」

日ごろは温厚な伊勢兵部の顔がけわしくなった。与茂作の返事は変らなかつた。責めてもすかしてもききめはない。

「首をはねられてもいえぬと申すか」

兵部は声をはげました。与茂作は平伏したまま動かなかつた。それが答えであつた。近習たちは息をのんだ。怒つた家久が、いきなり与茂作を手討ちにするのではないかと見たのである。家久の父島津義弘は、朝鮮役の折石曼子しませうの名を鶏林八道に轟かせ、関ヶ原の合戦に際しては、烏頭坂において敵中突破の離れ業を演じた勇将として知られている。その血を受けて家久も剛毅の性の持主であつた。ただではすむまいと、だれしも考えたのは無理ではない。が、意外であつた。

「さようか。首にかけてもいわれぬと申すものを、強いて聞くわけにも参るまい。兵部、なにも

いわずもどしてつかわせ」

「しかしながら……」

「よいと申すに」

奥へ去りかけた家久が、なにげなく振りかえったとき、おそろおそろ顔をあげた与茂作と目があつた。与茂作はまたあわてて、額を地にすりつけたが、その一瞬の与茂作の表情を、家久はいち早く見てとつた。家久は、もとの席にもどつた。

「与茂作とか申したの。その方、余になんぞ申したのであらう。違うか」

やさしいことばが、とっさに与茂作の腹をきめさせたらしい。与茂作は、伊勢兵部の方へ向き直つた。

「お側ん衆まで申しあげます。むかし御家中に、染川小八郎という者がおりましたこと、お殿様にはご存じでございましょうか」

染川小八郎は、天正九年の秋、わずか十五歳の若さで死んだ。父の名はたしか染川掃部かものという筈だと与茂作はつけ加えた。

天正九年といえは、家久は米菊丸と呼ばれてまだ六歳、むろん染川小八郎の名を覚えてゐるわけがなかつた。近侍の者も知らぬし、伊勢兵部にも記憶がなかつた。なにぶん四十年近くも昔のことである。家久は、右筆頭ゆうひつがしらの木脇忠太夫を呼び、古い記録類を調べるように命じた。与茂作に語らせるだけではすまないにかが、どこかに隠されている。しきりにそう考えられた。忠太夫は、部下の右筆方全員を集めて、ただちに調べにあたつた。